



八采園句纂

秋冬



八景園白墓秋之部



月

夕ふの月人の面を照る家への秋  
志々櫻又すすしとわかくとくふの月  
山里のきくちを秋苦くきふの月  
かきく櫻とやうふきくちをりくふの月  
名月や帯ふかくふきの月の  
明月やたしとくきくちの地のは  
名月や小さけきくちも江戸の海

名目の初めの季の華や枝の葉  
一生の襟を思は月をその那  
月をよや春をくみたる一人  
秋や秋やあつらふ月を折衣  
袷うしてかたむく月をみえ川  
雪の春月を心をかきみえ  
何時を月をみえたる月を  
雪は木下りの世をみえたる月  
雪の秋や人新うあつらふ月の中

十五秋を暮のころを瓜の如  
けよひや春はくもひのあつら  
みり月やさつらたる月をみえ

あつらふ月を

きこむ月をみえたる月をみえ

袖うさのころをみえたる月を  
手をとる月をみえたる月を  
こころ

山はるの春や月もつらみえ

雨中十三秋

とめく 海邊みづの 新初とぞ あり月  
後の 月をわく とも 交ぬ けり  
あらしの 野山く ちき子 丘の 月  
そくが けり 融あらし ちき 後の 月

柿本社奉納

かゝる 葉の むづ けり を 今 月 ちき 秋  
昔 月 心を ちき けり ちき ちき けり  
いし ちき けり ちき けり ちき けり  
いし ちき けり ちき けり ちき けり

秋 白く ちき や 月 ちき けり ちき けり

世は ちき けり ちき けり ちき けり  
ちき けり ちき けり ちき けり

秋 ちき や ちき けり ちき けり

あらし ちき けり ちき けり ちき けり  
ちき けり ちき けり ちき けり  
ちき けり ちき けり ちき けり  
ちき けり ちき けり ちき けり

秋 ちき の ちき

附令

大 ちき けり ちき けり ちき けり  
ちき けり ちき けり ちき けり

手よりたまごころぬる地をくさすのあこ  
学を驚く陸を好むやまごの秋  
たつたつともあつたつとあつたつあつた  
秋つら秋つらあつたつたつたつたつ  
くふ秋つあつたつたつたつたつたつたつ  
年たつたつたつたつたつたつたつたつたつ  
いつたつたつたつたつたつたつたつたつ  
秋つたつたつたつたつたつたつたつたつ

学は温香山

随一平秋異さりのの藪か  
去留ゆふは思ふくちあつたつたつたつ  
ゆふ月や人の中なるあつたつたつたつ  
あつたつたつたつたつたつたつたつたつ  
口の輝はかつたつたつたつたつたつたつ  
さつたつたつたつたつたつたつたつたつ  
握の葉や書りなつたつたつたつたつたつ  
人の寐つ後掃く門や雪の舟  
冬色や穢かつたつたつたつたつたつたつ

多し市やおくれ先さへ月夜の昔  
新柳の影法師も立ちる雪のうら  
虫痴も世の是れをさうり瓜の  
燈籠やかまきくくの燈籠つ  
燈籠やつゆさちの萩の明り色  
橋落て松を里やさうさう  
さくさくさうさうさうさうさう  
燈籠のうらさのさうさうさうさう  
かまきくあつさうさうさうさう

くさくさふたさうさうさうさうのゆきを  
いつさうさうさう

世の中やお子燈籠のすのあつさ  
何の風いきさうさうさうさう  
やあつさ

築とれを先さうさうさうさう  
本所所傳方はまはさうさうさう  
あつさそのあつさの星さうさう

みそおれや縁鬼はあつさあつさ

昆虫

一とあるは正業の月をふきつらざる  
あゝ勝や新成のまゝのまゝの  
幾とせしむるは東のむしの侍の形  
きつらざるは青の螢ある秋とあるは  
あゝとありて余の年をみよるに正業はす  
所くつらやあゝとありて袖の秋  
是の原の所は是のまゝのまゝの  
小玉の挿けいよのまゝのまゝの  
秋の原や 昔のまゝのまゝのまゝの

温泉の山

昔のまゝの黄たるを帯の秋の虫  
源氏強めたるはみよるを  
秋の原や秋の原の秋の原の  
秋の原のまゝのまゝのまゝの  
秋の原のまゝのまゝのまゝの  
秋の原のまゝのまゝのまゝの  
秋の原のまゝのまゝのまゝの  
秋の原のまゝのまゝのまゝの  
秋の原のまゝのまゝのまゝの





秋の秋を笑ふを笑ふはうき  
あさか菌は雲羅うきや四うき  
あかあしり秋風さうきか秋の秋  
舞のあひさめやうきを飛

早起猶坐

あさうけのあは思ふむいぬむら

錢所祐吉無不利何必  
讀書然後富貴

いそりしやあさうけの秋の神

取集りても中のあをあさうけの子  
のあつけは笑ても秋をかさうき  
笑うてのあは存あさうけのあは  
あはあやあはあさうけのあは  
あは秋をかさうきあはあは  
さあさうけのあはあはあはあは  
あはあはあはあはあはあは  
あはあはあはあはあはあは  
あはあはあはあはあはあは

夢〜や目のうつろひりめふま  
みりの月のうづめは咲あひま紫花  
寝ひのやまを〜〜くも日のつら  
飄〜く空の心をいささきりり  
か〜く瓜豆のまうせそなうれと  
あつらうねうつあひてゐるゆよ  
あつらうねうつあひてゐるゆよ  
相初と葉葉を日くねのまうせ

羽族

ゆふ夢のさや〜のしぬ芦は  
厚く〜る葉を〜るまうせ  
まうせ〜海を〜るまうせ  
大層の海は〜るまうせ  
まうせ〜るまうせ〜るまうせ  
大層の海は〜るまうせ  
まうせ〜るまうせ〜るまうせ  
まうせ〜るまうせ〜るまうせ  
まうせ〜るまうせ〜るまうせ  
まうせ〜るまうせ〜るまうせ

秋戸 舞る人とのあそびはを先か  
このしる日と暮のめくらを舞ひ日  
顔のと流るる水は けをぬく  
木つとや遊ばうも思ふ木こつる

石原の榊と舞子の  
いささといふも哀なる木を

いささの榊は名ゆるれとるる

乾坤

あつたさうな木榊あつたあつたの風

やうさうさうさうさうさうさうの風  
温かみの山や木履あつた秋のそと  
あつた風やつたつたの物と塔の細  
青井のつたつたつたあつたのあめ  
いさささうさうさうさうの秋のそと  
あつたさうさうさうさうさうさう  
桜の葉を吹りしつたつた秋のそと  
山雲や降子降つたつた秋のあつた  
さうさうさうさうさうさうさうさう



あふみの日や暮るも暮るに 歩留山  
笠伏と秋や赤城のわくわくを  
赤く雲を落すも青や秋のあ  
暮霞のわくわくもあふみ水

唐船画

西洋砲の流るるの流あふみの海  
折つともあやまのあふみの水  
近色る人や花聖のあふみの水  
わくわく水の中あふみの水

咲かすくく 榜あふみの水

畠事

掃よきく 舟を来も来は 稲よめ  
いなみのやいなみとあふみの水  
さくあふみの地もあふみの水  
舟治との 程はあふみの水  
船棹やあふみの水  
山の魚や一糸くけくを 稲咲  
近きいよあふみの水

おきしつひもおく新をよこ林いそ  
ひの家の日の出も秋のまをこの那  
い新のまひぬつるさきなり、集まらるる

厚風は雨にまじる陰を農業  
こゆつちをさるるもあつちあつち  
つひつちをさるるもあつちあつち

よの道そ新田刈る人の書りてきこ

赤里の中をさるるもあつちあつち  
あつちあつちをさるるもあつちあつち  
めつちあつちをさるるもあつちあつち

禁中をさるるもあつちあつち

新米や林をさるるもあつちあつち  
新米や林のふしつちをさるるもあつちあつち  
桑苗を疎のまきつちをさるるもあつちあつち  
荳苗をさるるもあつちあつち  
家じつちをさるるもあつちあつち  
山つちをさるるもあつちあつち  
雁横子つちをさるるもあつちあつち  
月日白きつちをさるるもあつちあつち  
山際の新米つちをさるるもあつちあつち

わつゝゝゝのこゝろを共々て並わつゝ  
雪雲をわつゝ足うけて案山子非

ののゝあははつゝとに終らぬ  
あゝこゝろをゆるゝとて  
をゝゝゝゝ

こゝん那世をたすゝもなきぬわつゝ  
末うゝや下結をうゝ過る木孫と  
今ゝゝゝゝも子前や本賊の八九月  
塔飛やをゝちう程夏の川のこゝろ

飲饌

酔ゝゝゝゝの彩極の清々たる  
見切あゝゝゝの中総ぬゝやゝゝゝゝ

そと極心帰ゝゝゝのりりあゝゝや

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

日たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
疎疎落や升たゝゝゝゝのあゝゝ  
手ゝのせゝゝのんゝゝゝゝゝゝ  
栞ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

控わくくくゆふ屋まけき唐わく

稼餅といふ巻

雪も餅や赤巻ぬきわう秋の味  
刺しとあつら九月又たきぬき巻  
和のくくお妹味もくやあきまきと  
巻くまきを人よりきりしわくはは

人事

春の日ふくまきわく新よきまきふ取  
お撰とま老て上手よりいりき

舟きぬま巻敷りてきまきかき  
就里の味はゆきまきお撰わ  
巻餅といふわけてい出て醒り巻  
雷又て巻ぬきくくまき巻  
老の秋巻おまき巻巻  
橋の巻のくくまき巻巻  
巻はゆきまき巻巻巻巻巻  
巻巻の秋巻巻巻巻巻巻  
心きくくくく巻巻巻巻巻



蓬意南志く孝く正しく結うぬ  
山あらしみくやまゝと止むまゝとぬ  
於うの孝はさうく結うぬく家  
地<sup>ハ</sup>垣をあらひよきうやまぬさう  
くぬおやうその結をあられぬ  
結うぬ垣あらうく、居かまぬ  
いり、安んじや藤層もさくれ石も  
引く秋の園をさうく、雲く  
十とせおと、焼ぬ山をうと、蓑<sup>ハ</sup>菌<sup>ハ</sup>

牽おのませえ、遠くまゝのこう  
こゆりたうお、中ノ足ゆ、木の多  
あ、のさふ心、く、種、松、ひ  
菴の松や、お、く、焼、も、あ、い、あ、葉  
ま、く、ま、あ、さ、ひ、く、や、う、あ、る、あ、ま、く、く、り  
松の窟や、く、あ、れ、さ、う、あ、ま、く、あ、の、般

後時令

くらしの遠や、聖の事、く、飛、を、條、岸  
川上あ、い、う、あ、る、秋、そ、能、く、む、る

秋の暮うらめしの聲をききし  
あまの暮死しきうらめしの如う  
る漏の尾端はあまの秋暮うら  
めしきうらめしの如う  
あまの暮死しきうらめしの如う  
あまの暮死しきうらめしの如う  
あまの暮死しきうらめしの如う

鹿

おとわむを風の吹の音 鹿の音

いますあまの山原の道や  
君さうせきをきくと  
あまの山原の道や  
あまの山原の道や  
あまの山原の道や

葉丹楓

あまの山原の道や  
あまの山原の道や  
あまの山原の道や  
あまの山原の道や  
あまの山原の道や

人語のまをのれをんまや葉のゆは  
勝きくやりの控る葉もゆりま  
きくかんもの爪まるとまをさうけぬ  
葉のまや葉の卵もんまあま  
ま〜ま〜や他まるとまあ〜か  
ゆ〜ゆ〜小杉の中〜のま〜ゆ  
葉のゆもまをま〜日短ま  
井り〜ま〜木を初ま  
は百も〜ま〜葉まゆ

山まやままぬま〜ゆ〜ゆ  
〜ま〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ  
小法師ハゆま〜山ま  
〜ま〜ま〜ま〜ま  
ゆま〜ま〜ま〜ま〜ま  
ゆ〜ま〜ま〜ま〜ま  
ま〜ま〜ま〜ま〜ま  
ま〜ま〜ま〜ま〜ま  
ま〜ま〜ま〜ま〜ま

移いきぬ並や丹楓の葉をさしめ

暮秋

うふのこの秋を暇うひはあさききぬ  
四五のちのちも逢ふあさきり  
秋ハリは酔ひきさるを減もきん  
あさききぬ百り物なきかかすあ  
紫雲ハあのみ山車しをくれのあさ  
ちんちんきと山里なるあぬ冬部  
冬部のいさききおまきく物なき由

墨をぬくを掃由をぬる

雜秋之部

画圖之猿桃を拵き

階圖の三子のこころいさかききお渡りて  
身をあやまてあさきり作らぬあさきも  
あさきあさきと仙林のこころい桃を拵き  
盗つと守りもさきとせお程飽きくさや  
おまきくささきもあさきあさき

人よぬあさきあさきあさきあさきあさき

摺延宝三調画賛

其の如人の心持は是なるを引く

と痛き人來て打修らつては白夢を  
節はさすれどもよく人を定むるを  
更定ハ又寐をりつて霧きしと  
濃材の一向をくみおいて人の  
風骨をあつてをくみおいて人の  
志くふやをれをうたるをくみ  
阿ふきりやをくみおいて人の

天然をきりつてをくみおいて

八景園白墓冬之部

雪

降る雪もわきに降きおや木の雪  
そはく雪もわきに降きおや木の雪  
身ひく川を焚のあつて木の雪  
あつて雪もわきに降きおや木の雪  
雪りくぬ雪もわきに降きおや木の雪  
孫重は雪もわきに降きおや木の雪  
雪の初や雪もわきに降きおや木の雪

無さめらちと雪かくよ人の家  
うしろ雪や松の戸さうてくう梅  
雪や月松や別ちう共みんる  
雪う雪う七朝ち恒種まうかあちと  
落種拾いのすこ出るは小雪あふ  
いあふ風呂の浅出を雪吹か  
柳うあうと立とゆる雪見う那  
一船ハさういふあうる雪見外  
岸の雪を朝ち氷をまうみう雪

大ハ舟雪つと捨る喋きこの那  
雪れう来し積戸の雪や松の雪  
雪物屋雪のぬる里とを足ゆる  
松さうや嵐も雪なりやうきれいむ  
雪る松の雪の河川をこの雪う雪  
雪の雪の足袋かん松をか雪うり  
雪あうや蓬生の焼の志免う雪  
松灯まついも新る小雪う那  
雪かうや雪物ちうをりあをう雪

くもすれを雪も糸のある小葉うな  
降つぬまうて雪か——井さう——ら

孟冬

松井と中よくせちやをさうたうる  
まひをやいひ所なき二三日  
人まう孝勤きくやま久冬来くも  
ちの冬や河をあらうまきく松雨  
十月やいづもちかしく能手化その  
十月やましくたう——家の集——

神まも葉め——好くかみたり月  
山麓のめささく起——小妻  
百怪のりけくやうたう小まうる  
小妻那やまふくれハ驚るをまうり  
嘉菜うりけ乃ぬ山かこる小妻  
中まうるまねのある小まうる  
丸ひらりいふをもたき小妻  
紫衣のわき枝やう久小妻  
さうまおる神の林の月まき

逢ふべき佛土の聲のくさるやうに

人教より入りぬはむ子のかきぬ月

深川映葉

一めんより富士の裾をうす小春の影

龍翁像を懐旧

豆蔻のたつひかゝるも子乃 我

いつさぬの本の景はいろは書をやき

入やまき山口のんまきく終を 我

人の踏進るまのまは儂をきとる

宗鏡は名せらるる濟の政中、のな

生植

下学をゆふ風烈しく人孝を

梅をさきくやせのく詠をくの孝

おめくると人平おられつゝ望を

梅をさきくやさひしき 菘乃 尾

折らるるも山茶がわをなうか

多しとけや巳うとをを咲毎に

水仙をきく免終の甲おとる



冬菊やうらうらひらけく癖のほく  
冬きくや河原をわらわの瀬に  
冬きくふしきわひあきききけり  
冬菊やうらうらひらけく合せ  
小雀や襟のつらけく冬のは  
明きくる聖火のあこや冬のは  
冬梅より日やうらきを沼寺  
松よるつらき冬梅や冬はうら

龜井戸多めの白梅

やうらうらき木かたのうらひの

重隆山

日あききやうらき葉をうらひの  
けり人の路をうらき冬もみち  
あふりのうらき冬もみち  
冬うらきやうらき冬もみち  
冬うらきやうらき冬もみち  
冬うらきやうらき冬もみち  
冬うらきやうらき冬もみち  
冬うらきやうらき冬もみち  
冬うらきやうらき冬もみち

ひらちかひのさきとてきふてあひ出さるる  
かへりてきふてあひ出さるる  
ひらちかひのさきとてきふてあひ出さるる  
あきとて

子十里のきり道やははよきとて川

郊外倘伴

梳棚の木の葉をまきく日暮也

乾 坤

山さくや露の中なるしむ時  
あきとてきふてあひ出さるる  
さくさく川砂を止まらばき

此森はさきとて時るの板かき  
あきとてきふてあひ出さるる  
あきとてきふてあひ出さるる  
山のさきとてきふてあひ出さるる  
梅の木のさきとてきふてあひ出さるる  
あきとてきふてあひ出さるる  
あきとてきふてあひ出さるる  
あきとてきふてあひ出さるる  
あきとてきふてあひ出さるる

此てもたうくゆふ暮んく初しと色  
赤松の幹のぬれり雪冬 のる  
冬 のるいろくのり社を去つぬ降る  
冬 の若の河の降るやらそしる人  
梅 園の滄土は君ゆるや冬 のる

遊きつた作をきく屋をんをさうをきく  
やつみ物をきあつめと思ふはさかなく  
庭の本立垣のさひとんゆりしき居ある

少しと雪がも時る内花波ぬき  
明後日秋はもぬるん冬 の月

大粒は初し雪くゆり冬 の月  
お通をくゆり雪く冬 の月  
山風や吹く雪くも月 秋 不  
京中やあはたひくは月 不  
去かすぬ秋をを手降る二の破  
木枯や戸明る葉はつゆり入る  
風や戸明る君れを星をいの雪  
出うりの木の根はあつる日暮る  
こかすや地を吹雪は町のさか

木枯や肉へまひ遊を毎の啼く  
まうりや日のつらくと玉か  
菖子ぬは小桶のせくる 雲 若 介  
是中へのみう有あふひ 雲の友  
雲秋の戸ひきまを 雲 若 介  
さいつに雲のかうくと 雲 若 介  
ぬく 雲の 雲 若 介  
いぬくうの眼をあふあつるみそれ  
雲あま雲のまふ木枯たやあふ

芦の家ハゆきまふまらふ 雲 若 介  
薄くふ人もまひく 雲 若 介  
山鉈日おあつて 雲 若 介  
小葉おつる人の見え遠く 雲 若 介  
花籠やまもかうぬる日 雲 若 介

は白くち雲のりてまふまらふ 雲 若 介  
まふのひしうあまのまふ出る 雲 若 介  
まふのひしうあまのまふ出る 雲 若 介  
あふまふのりてまふまらふ 雲 若 介  
まふまふのりてまふまらふ 雲 若 介

雲あままふまらふまらふまらふ

不世の財ゆふ影ささぬ初色那さの那  
聖代の誓まのさせるかれ聖う那  
四方のうら日の暮かさるう終那那  
その野や伐さる木を踏さり  
いさうくと赤橙のひさう世整計  
春結羽の色さ明りう終那う家  
かさし聖や葉のま結日不那さる  
あをれとも遠さうれ聖の乾りのさる  
查第まう結汗のう初色那う那

一勾のう巨いたる孝孝田つら  
その山嶽のをけはえ見ゆさうな

利根川のささる

冬川やうぬうみかさる葉けふ孝  
ふゆの海ゆさ孝とのせさ日の出ぬ

人事

象又易のうぬ象もささるむを結  
一月の事や姉ささをかめるまさ  
終のたさみちさるあをゆう那

國あゝ身の骨は強る衾の形  
森海は塔峨山つゝは安んずる由  
花籠と身をさひしる安んずる由  
のきては八月をそむる月の中  
古是袋や色もハチやわうおまじき  
横きくのそくむつゝは安んずる由  
深山も秋をひひ入る巨艦外  
身はしつゝを安んずる由  
んちくを安んずる由

埋まや聖よりくの身はしつゝに安んずる由  
うつゝは安んずる由  
理はしつゝ活層の葉のうつゝに安んずる由  
うつゝは安んずる由  
炭語をうつゝに安んずる由  
木の葉よりうつゝに安んずる由  
炭うつゝは安んずる由  
炭をうつゝに安んずる由  
うつゝは安んずる由

梅は森て花をさしひさきかゝるも  
和の木のこゝろ木魚とる小家も作里とる  
杜のやうな子足若く海を叫ぶなり

飲饌

水底は平家ありひそ海嵐の舟  
磯を破くともさきつる海嵐管  
大君の海、のうとく河豚、しき  
賣る人のみくみくれつ土わぬ  
子つくとおんりれく菜漬、し

五子 海猫の子 徳はゆきん  
かゝる娘のりや 納豆汁  
明きくの簗戸はちきれる干菜汁  
網代木やちりくと朽る  
紫漬やかき漬とれず 酔啼

羽族

十をうり孝明を家さるる千をいぬ  
卵のうり一夜は出さるむらちとる  
大さうな海を若るりのちと祭

橋下くハ来てひつろくまちかたの  
若あつううをゆわうのきほしとむし子  
大せひくつあくくしり孝川千を  
千を海松家を月乃照徹也  
つ志能をいくもつよ川ちと孝

上総のくふかぬやの聖弁をいふのゆ  
よあそふゆか風をきうしき等の様をいふ  
あて忠角を語るつ一脱は像の首のく  
きくやうく根世はまきり孝まひ上のま  
おのまはつて孝難くもあきまひつ

つりやうる身とあつて人きま小教あつて孝

かゆた病なる白息梅よそまや苦果  
船ちう家とくこのまらふたのく降乃  
まのあつて乃もとと心さしあつる  
あつてくくお勝をくれをるものくわ  
ちうま苦うわの乱世結せしまはと船  
あけく船をいつとく一歩一歩陸を  
お唄うてひつ勝去るいと心めくま  
あつて

船のくまあつて子あつて月も清

あめのちね遠宿や野の浪あつる  
物もねくあつて野より秋のく  
寤くあつてつゆと日けたるおか  
かもつりや并町まくの九ツ



さき蓋の月のやうなよかの紅き  
松明ゆくやぶら〜とあ〜芦のかを  
芦垣やとる春をうれたかの紅き

か 浦

浮鴨のゆき音をあふゆ根うり  
あ〜ゆき〜ゆき〜あ〜ゆき〜ゆき  
水もゆき〜ゆき〜ゆき〜ゆき  
心〜ゆき〜ゆき〜ゆき〜ゆき  
ゆき〜ゆき〜ゆき〜ゆき〜ゆき

同姓有榮枯 延宝調

みき〜ゆき〜ゆき〜ゆき〜ゆき

ある人より

〜ゆき〜ゆき〜ゆき〜ゆき〜ゆき  
ゆき〜ゆき〜ゆき〜ゆき〜ゆき

時令

夷〜ゆき〜ゆき〜ゆき〜ゆき  
夷〜ゆき〜ゆき〜ゆき〜ゆき  
黒〜ゆき〜ゆき〜ゆき〜ゆき

あさうふ物若くはふて十軒外  
番らふて新築するを至り於  
様基は日のごとくあるを至り  
書物屋の後あさうふを至り  
川初る事宇治の橋中事とらむ  
入川の中へは是きききりぬ

松島へりくふやうと

さうらうを新築するを至り  
成さうの身ハ何りのを信佛名

盗しち様の科を信佛名  
在るや管中さむき新築す  
戸明色をうしるを信佛名  
新築すもあつて横白やを信佛

年内立事

聖の日も何ごといふや  
町内の松竹れや水く新築  
お存しそゆくをうしるを信佛  
曆うしるは日ハ善みけき

ゆる晋の〜字も聖道能わつ〜

ある人の徳也

い〜ぬあ〜蘭の〜ひ〜古〜よ〜み  
花子柳也と只〜きぬも配〜孝  
宗因の培〜と〜れ素道や年  
天也と素わ〜の〜ふ〜けり  
節孝のや〜れ〜り〜のゆ〜自教

美山家

ゆ〜〜と〜〜〜〜〜孝ぬ宛 袋

扇谷の長名児石字の〜二白

襟并子〜と〜ぬ〜を〜  
見〜る〜ぬ〜い〜乃〜  
極月や門子つ〜〜在郷 馬  
号もあ〜〜  
月七日を評子わ〜る〜  
江戸川子扇た〜〜  
大舟のつ〜ひ〜  
お娘の栞〜〜

龜の子孫人なほききかぬし〜ありき

あつたつとるまふ〜あつたつとるまふの積のよめい  
は来つたつとるまふの積のよめい〜と積の  
よめい〜と積のよめい〜

十倍とまふの来つたつとるまふの人通き

廿九日のあつたつとるまふ〜初めはあつたつとる  
まふ〜あつたつとるまふのあつたつとるまふ  
まふ〜あつたつとるまふのあつたつとるまふ  
まふ〜あつたつとるまふのあつたつとるまふ  
まふ〜あつたつとるまふのあつたつとるまふ  
まふ〜あつたつとるまふのあつたつとるまふ  
まふ〜あつたつとるまふのあつたつとるまふ  
まふ〜あつたつとるまふのあつたつとるまふ  
まふ〜あつたつとるまふのあつたつとるまふ  
まふ〜あつたつとるまふのあつたつとるまふ

月のとる廿九日のあつたつとるまふ

雑之部 神釋意

題 暁

あつたつとるまふのあつたつとるまふの人

樵 夫

樵入るやあつたつとるまふのあつたつとるまふ

漁 夫

あつたつとるまふのあつたつとるまふの上

農 夫

あつたつとるまふのあつたつとるまふの底

原の宿より

ゆる草やたぐもあそそぬーの山  
一とをのうつる色たがー市士の山

冬景懐旧

冬景の世もあそそぬーの山

わさ白雲あま川のむらやーきう舟集ふ  
よりあそそ舟を志すもき降出くおの  
まうくそへきやうもたうらうーの初秋  
さうさゆよりやうらぬあもあやこ風も  
あつちりそぬーの山

月夜やまよとこある蓬の内

三保の松の木りそつとれる文書をあや  
幸アとらると雲とそりあまの白小生れ  
おのく句きよと仰あそそを表の画を己の  
草とそつとつさる山のそとこいし松とそと

兄とそりそりよりそとまこそつとるの宿

題教

雨をれりそつとる手とそつとる教の那

自警

いそへそつとつて鑑とそつとるそつとる  
のそつとつとつとつとつとつとつとつと  
そつとつとつとつとつとつとつとつと

月の夜やそつとつとつとつとつとつと

應其需昂事

肆非宋末賣う人の所〜とのふて持あつゝふ  
 ののろそれをその所〜孝母格ひて〜、  
 又や関く〜と〜やう〜やさき〜祠少祝より  
 うわむ益ありとありつゝか〜と〜たり是あぬ  
 つち此賜ある後中々かの〜一舟の所り  
 中不本村と書まつるも〜文字ありかのつゝ  
 あ〜〜家辨の本村を〜に協ひ〜、  
 ともさ弟福と外〜の〜中〜の〜めなる  
 のの物然〜と〜と〜幸ハヤ子  
 い〜と〜か〜い〜は〜と〜な  
 あひて

乃ふ〜孝母と〜花も〜や〜〜四月い〜  
 或時〜新事

庚申年泉月の子ありふあ〜と〜  
 降〜と〜私盗〜、  
 乃〜と〜高なれ〜あ〜と〜  
 これ〜満羸の劣を〜の〜極も  
 君〜と〜法つ〜きぬの〜と〜  
 茲らけ〜と〜の〜一ぬ〜と〜  
 の〜と〜ぬ渠〜と〜壚〜と〜一杯の  
 あ〜と〜も〜と〜と〜の〜と〜  
 の〜と〜と〜と〜と〜と〜  
 い〜と〜と〜と〜と〜と〜  
 幸〜と〜の〜と〜と〜と〜  
 うち〜と〜と〜

志〜と〜の〜と〜涼〜と〜袖  
 故の〜と〜法も〜と〜と〜と〜  
 鬼ぬ〜と〜画〜と〜

やまのうきさきく 仰いで 澄るをよる 萩  
月のうら 花笠  
やまのうきさきく 梓の葉よる 月乃白  
うたの 夢のむら

かゝらと日 萩のそと ちゆる 花の那

いーま 梅の園を 子あまの友とち 打よりて  
あふま いろく 詔書子のいさかひは 終白り  
秋を弄ひ 思ふを ちと 布す 日の萩もに  
那のうきさき 風さわりのうき

うきさきや 月 萩のうら 見る すまの川

あふま いろく 詔書子のいさかひは 終白り  
秋を弄ひ 思ふを ちと 布す 日の萩もに  
那のうきさき 風さわりのうき

日 房の子いさか 鏡の表の時の交は 色今人 持て  
土のぬく いろく 詔書子のいさかひは 終白り  
あふま いろく 詔書子のいさかひは 終白り

山 梯 や人のうら 萩の 拾ひ ようき

あふま いろく 詔書子のいさかひは 終白り  
秋を弄ひ 思ふを ちと 布す 日の萩もに  
那のうきさき 風さわりのうき

あふま いろく 詔書子のいさかひは 終白り

あふま いろく 詔書子のいさかひは 終白り

あひなごころをいかにかきこむるにまじりて  
こころをいかにかきこむるにまじりて

此やうに母はく孝をそとへて福つらぬ

画自像題之

為師難哉然學亦為不易矣遊于世六十餘  
年何日辞世可休去在茲者是永乎月歟

あゝぬりのこころをいかにかきこむるにまじりて

慈翁のこころをいかにかきこむるにまじりて

おのれはわがこころをいかにかきこむるにまじりて

わがこころをいかにかきこむるにまじりて

おのれはわがこころをいかにかきこむるにまじりて

廻文あり

おのれはわがこころをいかにかきこむるにまじりて  
おのれはわがこころをいかにかきこむるにまじりて  
おのれはわがこころをいかにかきこむるにまじりて

おのれはわがこころをいかにかきこむるにまじりて

おのれはわがこころをいかにかきこむるにまじりて  
おのれはわがこころをいかにかきこむるにまじりて  
おのれはわがこころをいかにかきこむるにまじりて

梅十日後わがこころをいかにかきこむるにまじりて



江戸のそとれ名漢の町新町の境内より川筋  
いつき花見のていさき花見の二井の傍より  
三井の森をさぐりてのていさき花見の  
ていさき花見の傍より花見のていさき花見の  
わがわが花見のていさき花見のていさき花見の  
わがわが花見のていさき花見のていさき花見の  
わがわが花見のていさき花見のていさき花見の  
わがわが花見のていさき花見のていさき花見の  
わがわが花見のていさき花見のていさき花見の

そとれ名漢の町新町の境内より川筋

免の朱者安太も強は横きこと書らる

月夜もは夜よりくわいづの夜

皆得解脫 經文歌 善門品

人間もかゝるあまはるそとれ名漢の町

龍女成佛 日 龍溪品

聖の子や若しもわくくわいづの夜

母のくわいづのていさき花見のていさき花見の  
とるあつたていさき花見のていさき花見の

わがわが花見のていさき花見のていさき花見の

わがわが花見のていさき花見のていさき花見の

孫も命と株笠のていさき花見のていさき花見の

偶成

閑る口あきくうくくく木魚の歌  
火老とわいつ世末 燈のあてか

佐善要の筆字に支那の如くもの  
もあかしくおひひらぬる百りあひ  
うそやうくち終世といふうそ  
懐疑のころあきあきうそ  
つらめ息あつちよりたりやきく諸悪莫作の  
四字こそ心も湯く忘れさう  
極の度長舌をうんとつもの言もくれ  
悪本くる吾はハチウチか増る吉如の裡味ある  
へきやとりの人ををう

きくゆたりや 燈のちあくと 筆のち

いかたのこは

いさる悪くは

ゆりゆりみ 繚の帯やか

賤 意

鶴蓋のあきく

不意 意

きくゆたり 月塚

意 意

改いゆり

意 意

急死ぬとそ〜言〜も家〜の音

恨意

そなたのあはれむる女の〜あからまつ〜のね  
たつたか〜の書か〜るさ〜お数白紙  
つ〜も道〜その〜れは〜わ〜

か〜もた〜み〜せめ来るゆ〜ゆ

哀傷慶賀之部

悼家鳥

生死無〜たあ〜は〜の相をん

於前と短〜いひ算量と出〜るひは  
つ〜もいつの世よ〜死〜る人の  
〜や〜い〜の〜

あ〜る〜り〜れ〜一〜櫓〜の形

時自念月集〜せぬ〜け〜

後何茶の美〜も〜も〜秋の音

寛政壬子の秋九月子規字は月舞思馬の  
あ〜れ孝川信留妻ある〜て悲福をわ〜  
あ〜甘詠をむ〜る長月の内〜る  
あ〜た〜り〜る長月の内〜る  
あ〜この長月の内〜る  
あ〜る〜る内〜る〜人何ぞ  
う〜も

ゆめをやはらぐしきおのしみとま

成田の左様身よりまぬとまをさる  
平目二りのりんたき

精進よりわつて味をきこ難者よ

田村つ子うねニツ子わをさるみ

花は袋のあつてへもわをきおの上

算屋の業此道書

心よりそ存りたきさ田のまをさる

悼見直

あつてわつてひもさるまをさる

足田をさるのいへまをさるの  
のいへまをさるわひた

業更子わつてぬ業ぬりたをさる

悼本心

世よりあつてのたのしきをさるのまを  
さる

あつてわつてぬ業ぬりたをさる

あつてわつてぬ業ぬりたをさる  
あつてわつてぬ業ぬりたをさる

あつてわつてぬ業ぬりたをさる

あつてわつてぬ業ぬりたをさる

あゝひとゞむ共暮みおのいささう誰  
 時のひろひつゝいひ。

一生心と備わくあきゝ〜暮乃共

貞阿房いゝゝ〜麻せまき

暮の暮の河もさう〜きえん〜櫻々

抱羞さゝもさう〜きえん〜きえん

新〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

だゝるもやま〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ  
 此の新仙遊室の個々〜いのをさのさ〜い〜い〜い〜い  
 岸々〜岸々〜岸々〜岸々〜岸々〜岸々〜岸々〜岸々  
 かし〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

在りた人の数はわかさ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

筆の書もきひ〜きひ〜きひ〜きひ〜きひ〜きひ〜きひ

そのめと女ある園のこのみまつ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
 ねあつ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
 ち〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
 ち〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

山吹やなま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

書巻の且慕

かみ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
 ぼ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
 窓のま〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い



うんちやく成てぬあまきうしれくまの  
あやうやあまのうしちかあひる

花ころりもかすく日も孫さなみくが

其居の境を知れりて奉の亡法をり

終日身と力進くくの古き産ぬく西

丁知の室千ぬのといひ

まゝくくむ有る蓋もぬ鏡の形

丙戌のく吉原の遊女玉菊の百回忌とく  
らひ集あめり河りのりくまうと書り  
あまかのまきくやまひあつりくか  
らひくまうくあ南きく産くひあま

くく路もあぬあまのくくれぬま  
くあまれとやなきくくんまをく  
くく物産佐分とくくあまのく  
くくくくもたかまのくくく

姫売のなもんく書をあまの

髑髏の積

雲く雲帰くくくあまのく  
みくく奈ありて玉蛇のくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく

いんじんを色を脱ぎ去るとはなつたも  
あまのり子かきくぬりのをきく  
寝の杉風

か〜〜あ〜あやあはあき〜あ

慶賀

素道八十歌集の巻

上総浦空の暮はあまのり子かきく  
ぬりのをきく

長いきうちあまのり子かきく

や其六十一

あ〜〜あ〜あをあはあき〜あ

百五序うぬりのあまのり子かきく  
ぬりのをきく

うぬりのあまのり子かきく

あまのり子かきく

あ〜〜あ〜あをあはあき〜あ

六十一うぬりのあまのり子かきく  
ぬりのをきく

あ〜〜あ〜あをあはあき〜あ

あまのり子かきく



おさうけりよきおつらんあみとま

孤堂の箱九十の知事迄を意あふく自作奉  
答のついで福引は賑らさる平八老松也  
録らる奉答をゆくま

今まきく——匙カヒのききも松のまを

昔よりわくく静な所道ハ一日も是あ日と  
ともあらんりのち葉念のま莊子このを横  
いゝ幽たれどもあふくはま秋の録めくハ  
高くそ貌ゆ後あふくも天晴まをたはるく  
をま——まもあかひまのあまをい静まを  
いもあふくこくあふく人な心こま静の静まを  
いゝあふくあふくく健なそ静まのまを  
あふくあふくあふくあふくあふくあふく  
くあふくあふくあふくあふくあふくあふく

寛政一日高白紙をこく——と出のあふくあふく  
静まを

花を足く月を足く君百四十

句纂後記

乞お詠るるも郷中予々々々あつと捉へ物の  
學の師とす業は〜〜位を〜〜討き  
やりし其の元々の中書のおおとんは其の  
其の師の招きを〜〜と〜〜  
す〜〜人〜〜も〜〜と〜〜  
す〜〜人〜〜は〜〜人〜〜世は〜〜  
屋〜〜吾師の案の柱を〜〜の事は也  
久も其師業太の門下〜〜

浦新の流るる所あるは且心あるなる

板子のまきむむと刀のあはれぬ *おれ*

端と目どかき指さすはくしの年よにやう

酒巻の虫栖もあへる活計のとすはりの

はりしつかはれもあましくもあま

死道流の一本あは生流もあめぬはくし

定やけしやとて休のらあもあま

あめぬ *あめぬ*

筆の藤屑のあはれはくしや指さす

おれ様おあはれぬとまきさす *おれ*

と目の上のくまらおれ様あはれぬ

あへるけり中おれ様のしんあはれぬ

とて *あへる* 袖さあはれぬとあはれぬ

おれ様のくまらおれとまきさす *おれ*

あへるおれ様とまきさすおれ様のしんあはれぬ

又昔のの中まきさす *あへる* おれ様の

中おれ様あはれぬとまきさすおれ様のしんあはれぬ

のしんあはれぬとまきさす *あへる*

ついでに後述する一々後述する種々の事々々々々々  
中央の集々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
九ありくおん勢々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
ニニニ類々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
白算算々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
す々々々中々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
後述の事々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
人從々々知々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
あ々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
あ々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

先は葉葉々々々々中々々々二世の学々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
口々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
や々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
大季々々々々の行々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
を漢語の詞々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
葉々々々々の二々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
ま々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
もの氣々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
あつ々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

と終るに初に字をの人の台のほを  
おとすを夫の何の止法よみの動静おん  
葉宗二林の性質凡熟も働るを後  
屋を平しそもと終る家

七律年お秋日 中仙子丁知

天

云

